

海外につくられた日本庭園の系譜

鈴木 誠

東京農業大学造園科学科教授

国際日本庭園研究センター長

はじめに ～日本庭園の海外への紹介

日本の庭園の形が明確になりつつある頃、海外（中国大陸）からもたらされた文化が、大きな役割を果たした。

奈良時代の庭園は、中国からの影響を強く受けたものだったが、平安時代になり国風文化の隆盛と共に、日本独自の庭園の形が洗練されていく。公家文化中心の平安時代から、武家文化が台頭し主導的な立場となる鎌倉～室町時代には、既に日本庭園の形が完成していた。

この頃、16世紀の後半（室町時代）にはキリスト教宣教師らが日本を訪れ、ヨーロッパの庭園と日本の庭園を比較してその特徴を記述¹、また見聞きした日本庭園（京都）へ賛辞を記している。²こうして、日本庭園についての情報はヨーロッパにまで届くことになるが、17世紀に始まる江戸時代の鎖国により、わずかに長崎のオランダ商館員（ケンペル、シーボルトなど）を通じ、主に植物の情報が海外にもたらされるだけの時期が続いた。

明治時代になり数多くの外国人が日本を訪れ、また日本人の海外渡航が可能になるまでは、日本以外の海外に、本格的な日本庭園が造られることはなかった。本格的な日本庭園が海外に造られるのは、やはり万国博覧会における明治政府出展の庭園を待つとあってよいだろう。それは、1873年（明治6年）のウィーン万博においてであった。

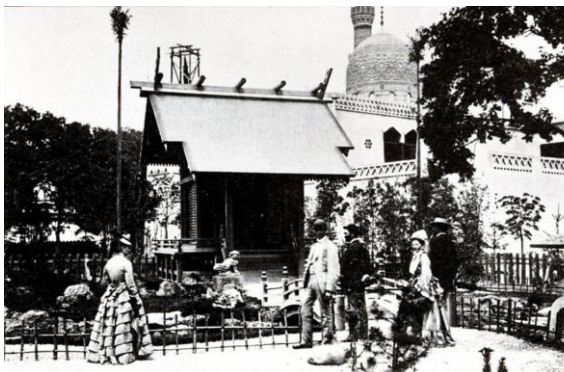


写真1 ウィーン万博の日本庭園³



写真2 ウィーン万博の日本庭園⁴

1. 初期万国博覧会の日本庭園とその影響

ウィーン万博に展示されたのは神苑風庭園で、社や鳥居を中心にもつものであった。この時に庭園で使われた材料はその後、イギリスのアレキサンダー宮殿の庭園に移設転用されている。この後の1876年フィラデルフィア万博、1878年パリ万博、1889年パリ万博、1893年シカゴ万博、1900年パリ万博と、毎回日本の展示施設には様々な美術工芸品などと共に庭園が出展され、19世紀末からの欧米におけるジャポニズムのブームを引き起こした。

こうして、19世紀末には海外における日本文化の紹介に触発され、日本を訪れる外国人も増加する。これらの外国人が、日本から家屋や調度品あるいは庭園材料を自国に輸入し、大工や庭師を連れ帰って自宅に庭園を築くようになる。よく知られた例では、フランス人ユージュ・クラフトの自邸「ミドリノサト」（1885年頃完成、その後も拡張整備）がある。彼は自邸を日本式にして庭園を設け、その庭園の改修・管理に専属の日本人庭師（畑和助）を雇っていた。⁵

アメリカにおいても1893年シカゴ万博、1894年のサンフランシスコ真冬博覧会（国内

博)の頃には、ジャパンフィーバーが起こっていた。既に、個人庭園として日本式の庭園はあちこちで作庭されていたようだが、このサンフランシスコ博の時に出品された日本庭園は、広く一般に公開された大規模本格的日本庭園の最初のものであった。⁶



写真3 サンフランシスコ博⁷

この日本庭園は現在のゴールデンゲート・パークの一角にある、ジャパニーズ・ティーガーデンの一部として現存し、アメリカ最古のものとなっている。

20世紀の万国博覧会の日本の展示施設には、より大規模に日本庭園が造られたが、1930年代後半には第二次世界大戦、太平洋戦争により万博自体の開催が20世紀後半まで待つことになる。この時期の万国博覧会・国際博覧会に造られた日本庭園の系譜については、別項「国際博覧会と日本庭園」を参照されたい。

2. アミューズメントパーク・商業施設としての日本庭園

アメリカにおいては、アミューズメントパークの一角にジャパニーズ・ティーガーデンとして、異国情緒あふれる遊園地的な施設、あるいは庭園をもつ料亭といった施設としての開設も多くあった。その多くは、日本人実業家らの海外における事業展開によるものだった。先にあげたサンフランシスコのジャパニーズ・ティーガーデンはその代表的なものとして、1895年からは日系人萩原眞の経営により拡張、整備、管理され、さらにその後は市が経営し当初面積5倍となって現在に至っ

ている。

これより先、1891年にはカリフォルニア州ピディモント（オークランドとバークレーに隣接）のブレア・パーク内のリゾート施設として、ジャパニーズ・ティーガーデンが設けられていた。盛況であったのか、隣接したオークランドのピディモント公園には、より規模の大きなジャパニーズ・ティーガーデンが1900年に開園している。⁸また、アメリカ東部ではリゾート都市アトランティックシティに日本人（新居三郎・櫛引弓人）の事業運営により、1896年大規模なジャパニーズ・ティーガーデンが造られた。



図1 ジャパニーズ・ティーガーデン

この庭園が1900年に閉園した際、園内の庭園材料の一部はニューヨークに運ばれ、マジソンスクエアガーデン屋上の日本庭園築造に再利用された。さらに、1904年頃にはカリフォルニア州モンレーの近くパシフィック・ポイントに、1907年にはカナダのブリティッシュコロンビアのゴージェ・パークに、1918年にはサンアントニオのブレッケンリッジ・パークにも同様なジャパニーズ・ティーガーデンが造られている。⁹

これらのジャパニーズ・ティーガーデンと、プレジャーガーデン（遊園）的日本庭園について若干補足しておきたい。日本の家屋と庭園、それに付随する家具調度品や盆栽などの植物の展示、そして訪れる人々への茶の振る舞いとみやげ物の販売。このワンセットとなる日本風環境設定と、そこでの着物を着た日

本人女性の接客サービス。このイメージこそジャパニーズ・ティーガーデンそのもののイメージであった。この展示施設的な日本の家屋と庭園は、万博に出展された日本庭園のイメージであり、実際に万博では来園者に様々な日本製品を売ったり、茶のサービスをしたりした。1876年のフィラデルフィア万博の日本の展示会場は二つあり、その内の一つはジャパニーズ・バザー・アンド・ガーデンと命名されていたが、これは煎茶を振る舞い当時輸出高の第2位を占めた日本茶を売るための商業的展示施設であった。今もこのイメージは、サンフランシスコの日本庭園（ジャパニーズ・ティーガーデン）に見ることができる。

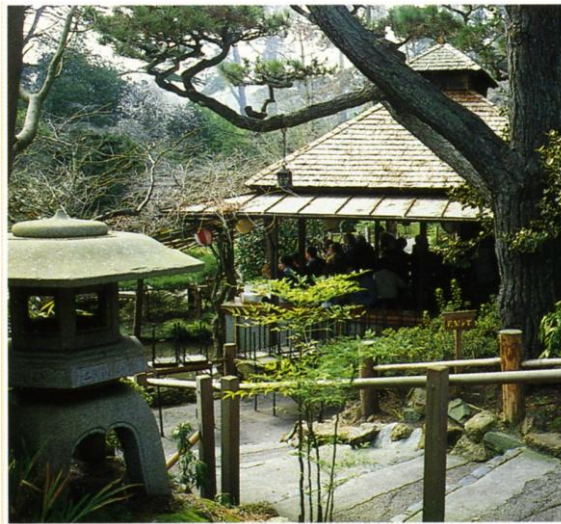


写真4 ジャパニーズ・ティーガーデン¹⁰

こうした博覧会における商業的な展示は、現在も同様なものが見られるが、当時も万博は国の文物を売り込むためのプロモーションの場であった。万博における日本のプロモーションは成功を収め、19世紀末からのジャポニズム、ジャパンフィーバーを巻き起こしていく。これが、博覧会場以外に商業施設としての独立したジャパニーズ・ティーガーデンを、アメリカ各地に生み出していった。

明治時代中ごろ（1880年代）の日本でも、庶民のための民営園地が日本庭園を下敷きとしてあちこちに造られていた。庭園の中に茶屋があり、花や珍しい動物などを楽しんだ遊園は、東京では例えば浅草の花やしき、向島百花園、向島小松島園などが有名であったし、

庭園をもった料理屋としても向島の武蔵屋やビール園（佐竹の庭）などが人気を博していた。¹¹こうした遊園的な商業施設（プレジャーガーデン）や料亭が、事業経営と共に日本庭園を伴ってアメリカに輸出されたといってもよいだろう。

海外におけるプレジャーガーデンの一形態としての日本庭園の系譜は、現代にまで生きており、例えばサンディエゴ・シーワールド内の日本庭園（ジャパニーズビレッジ、1965）、フロリダのディズニーワールド内エプコット・センター（1982）の日本館と日本庭園などに見ることができる。

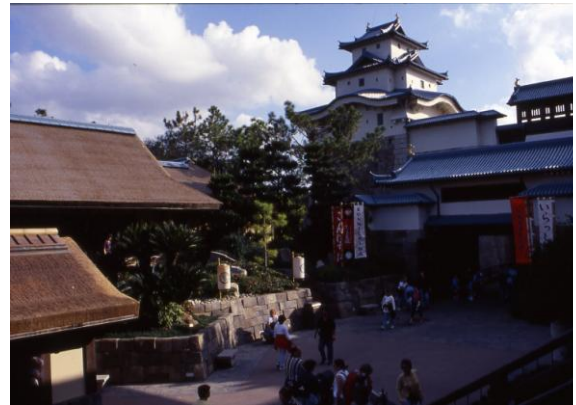


写真5 ディズニーワールド内
エプコット・センター（1982）

なお、レストランなどに付随して設けられた古い日本庭園としては、パリのデパート・ボンマルシェの迎賓施設の日本庭園（シネマ・パゴダの日本庭園として一部現存、1897）、ハリウッドのレストラン・ヤマシロ（一部現存、1914）、などがあり往時の姿の一部を現在に留めている。

また、この種の日本庭園として現存しないが1919年、ニューヨークのリッツカールトンホテルのメインフロアーに造られている。日本庭園を嚆矢として、その後も造られ続け世界各地のホテルやレストランの日本庭園としてみる事ができる。

3. 日本趣味の個人庭園とその公開

19世紀末から20世紀初頭には、日本を訪問した欧米人、ジャポニズムのうねりの中で日本の文物にあこがれた人々により、日本趣

味をもった家屋や庭園が造られた。

既に紹介した、クラフトは日本訪問を機にミドリノサト（1885年頃）を造り、同じ頃やはり日本訪問時の体験から日本の植物を集め、日本人大工に建物を建築させたド・ベルシーニ男爵夫人邸庭園（1885年頃）が早い事例である。これに類似して日本の植物、石造美術工芸品などを配置した庭園の現存例としては、イギリスの元駐日大使ミットフォード邸の日本風庭園（1890年代）、オランダのクリゲンデール邸庭園（旧ヴァン・ブリーネン伯爵夫人邸、1890～95年）などがある。そして、20世紀の事例で現存するものとしては、日本に数回滞在して自邸の構想を描いたウィリアム・ホールウォーカー大佐の旧宅タリー日本庭園（1906～10年）、アメリカのサンフランシスコ郊外に造られたスタイン夫妻の旧宅ハコネガーデン（1915～18年）などがあげられる。



写真6 スタイン夫妻旧宅ハコネガーデン

日本滞在経験はないが、日本風の庭園を自ら築いたものとして、フランスのジベルニーに現存するクロード・モネの日本風庭園（1893年）、同じくフランス人建築家アレキサンデル・マルセルの旧宅であるモレヴリエ東洋庭園（1899～1913年）などが代表例である。

なお、カナダ・バンクーバーにある有名な花の庭ブッチャートガーデンの創始も、日本趣味に傾倒したブッチャート夫妻の日本風庭園の築造（1904年頃、現存）からであった。

以上は現存して公開されている例だが、こ

のほか日本趣味が高じて自邸に個人庭園として日本庭園を築いたもの、日本風の庭園を築いた数は19世紀末から20世紀の1930年代までにかけて相当量あった。それには、こうした日本趣味、日本風、あるいは日本式造園をバックアップする技術者や、庭園材料、日本庭園に関する情報の海外への展開が背景にあった。1890年代のアメリカにおいては既に、日本人自身が渡航し、現地に滞在し、あるいは移民となって日本庭園づくりをしており¹²、組織的にも横浜植木サンフランシスコ店開業が1890年、ニューヨーク事務所開設は1898年（1902年同支店）、ロンドン支店開業1907年であり、また古美術商山中商会ニューヨーク店の開業が1894年、ロンドン支店開業は1900年のことだった。

一方19世紀末、アメリカ人エドワード・モースやイギリス人ジョサイア・コンドルらの日本庭園に関する著作¹³や写真などを基に、海外で現地の人々独自の個人庭園の作庭も始まっていった。当時の欧米で刊行されていた造園・園芸関係の雑誌には、日本の庭園や植物の特集記事が見られるし、これまで日本庭園に関する各種欧文文献は、具体的に200点以上確認でき（2005年3月現在）¹⁴、こうした書籍などを通じて独自に作庭される世界各国の個人庭園の数は膨大な量となっている。



写真7 カリフォルニアの個人庭園

なお、非公開の日本趣味の庭園、日本風庭園もありその中でも大規模かつ、古いものではベルギー国王のラーケン宮苑日本式五重塔

周辺（1901年）、旧台湾総督官邸庭園（現台北賓館庭園、1901年）など、新しいものとして、コンピュータ関連の米大企業オラクル社主ラリー・エリソン邸庭園（サンノゼ郊外ウッドサイド、1995～2004年）が知られている。

4. 様式コレクション（テーマガーデン）としての日本式庭園

日本式庭園の目新しさ、日本の植物の目新しさが人々に知られて起こる19～20世紀にかけての日本庭園ブームは、既存の庭園の一部に新たに日本庭園を追加して造園することや、様々な様式をもった庭園を組み合わせた、新しい造園様式（混成様式庭園、ミックススタイル・ガーデン）にも影響を与え、その一部に日本式庭園が取り入れられたりもした。

既存の庭園に日本風庭園、日本式庭園を付け加えた現存事例として、ウィーンのシェーンブルン宮苑の日本庭園（1913年）、フランスのクーランス城内の日本庭園（1930年代）などがあり公開されている。混成様式庭園の中の日本庭園としては、パリ郊外の旧アルベール・カーン邸の日本庭園（1894～1910年）、ニース郊外の旧エフルシ・ド・ロトシルド邸の日本庭園（1905～12年）、ロサンゼルス郊外の旧ハンティントン邸であるハンティントン植物園日本庭園（1912～13年）などに見ることができる。



図2 ハンティントン植物園日本庭園

ハンティントン植物園は、様々な様式をもった庭園部分、特定の国・地域の植物コレクション部分が集まって植物園を構成しているが、元はハンティントン家の個人の庭園が、後に財団管理となり一般公開されるようになったものである。これと同様に、公共の植物園のコレクションに本格的な日本庭園と、その植物を加えようという動きが20世紀のはじめに現れた。

ハーバード大学附属植物園アーノルド・アーボリタムは1903～4年にかけて、横浜植木を通じ日本から80種類のサクラを輸入している。そして、本格的な日本庭園が公共の植物園に造られたのは、1915年のニューヨークのブルックリン植物園のものが嚆矢となる。その後、市営植物園、大学附属植物園などに日本庭園を造る計画はあったものの、アメリカにおいて多くの植物園に日本庭園が造られるようになるのは、太平洋戦争後の20世紀後半である。特に1970年代に、植物園のコレクションとしての日本庭園区画がアメリカで数多く設けられた。フォートウォース植物園（1970）、シカゴ植物園（1972）、ミズーリ植物園（1977）、デンバー植物園（1979）などである。



写真8 シカゴ植物園

特筆すべきは、フォートウォース植物園の日本庭園が地元日系人による設計である以外、他の3園全ての造園家がロサンゼルスを拠点として活躍した川名幸一（1930-1990）であるところである。川名のプロモーションによるところも大とってよいだろう。¹⁵

アメリカではこのほかに、ワシントン大学

植物園（シアトル日本庭園、1960）、サンアントニオ植物園（熊本園、1989）など。アメリカ以外では、ハンブルグ大学植物園（ドイツ、1978）、ソ連科学アカデミー植物園（旧ソ連、1987）、プランテン・ウン・ブローメン（ドイツ、1985）、ウェールズ王立植物園（英国、2001）などがある。

また、植物園とは別に美術館・博物館の展示コレクションに加えられた日本庭園もある。ケルンの東アジア芸術美術館の日本庭園（1977）、東洋美術コレクションで有名なボストン美術館の天心園（1988）、フロリダの日本博物館であるモリカミ・ミュージアム日本庭園（2001）、パリの東洋美術コレクションで有名なギメ博物館別館の日本庭園（1992、2001 茶室を追加改修）などである。

5. 日系移民コミュニティの日本庭園

海外に渡り、移民として現地に暮らす日系人にとって日本文化を象徴する日本の建築や庭園は、彼らにとってのよりどころである。北米、南米を中心に日本人移民の歴史は 100 年以上におよぶ。また、日本庭園が海外に築造される初期において、海外に単身渡った日本人も多かった。こうした背景から、特に 20 世紀後半になり日系移民の第一世代から第二世代（2 世）に時代が変わる時期、また、太平洋戦争後の新たな海外移住者が増える時期に、規模の大きな日本庭園が造られていった。

北米ではサンノゼのケリーパーク日本庭園（1965）、ロサンゼルス JACCC 日本庭園（1980、）、南米ではアルゼンチン日本会の寄贈によるパレルモ公園日本庭園（1967）、ボリビアのラパス日本庭園（1972）などである。

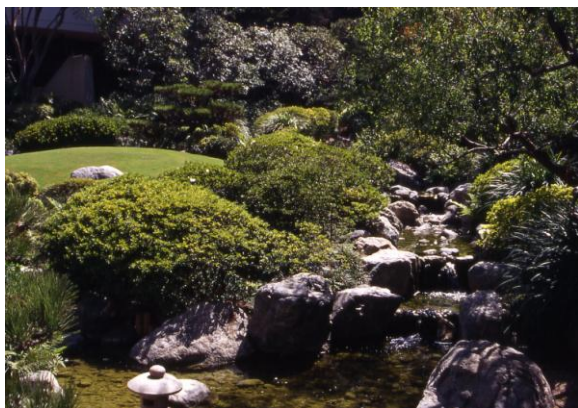


写真 9 ロサンゼルス JACCC 日本庭園

なかでも、ハワイ島のリリウオカラニ・ガーデンは、2 度の津波被害による改修を受けているが、最初の姿は日系移民により 20 世紀初頭に造られたものだった。

これら公園などとして大規模に造られた日本庭園でなくとも、日系移民が集まり住む所、日本人町には街角に大小さまざまな日本庭園が造られてきたし、また、海外に造られた日本庭園が日系移民や在住日本人たちの集う場となり、心の支えとなっているところも少なくない。

なお日系移民の造った庭園で、特に歴史上記録されるべきものが、太平洋戦争中のアメリカにあった。日系アメリカ人たちが、強制収容所生活を強いられたキャンプ内に作庭した日本庭園である。現在その姿は記録に留められるだけだが、¹⁶日系移民コミュニティの日本庭園として、その役割をよく果たしたのがこれらの庭園であった。

6. 20 世紀後半から新たな使命をもった海外の日本庭園

太平洋戦争が終結する 1945 年以降、20 世紀の後半になると新たな使命をもった日本庭園が海外に造られるようになった。

不幸な戦争に直接関わっては、戦後アジア各地に設けられた慰霊公園に造られた日本庭園がある。鎮魂、慰霊の思いをこめて日本式の庭園が造られたが、その事例としては、サイパン島戦没者慰霊碑公園（1975）、フィリピン戦没日本人慰霊園（1976）、北ボルネオ・ラブアン戦没者慰霊庭園（1976）、オーストラリアのカウラ日本庭園（1977）など、1970 年代の半ばに集中している。



写真 10 オーストラリアのカウラ日本庭園

一方、1960年代以降、日本からの文化輸出・文化交流の目的をもって造られた日本庭園も増え始めた。それらの代表的なものが、大使館や日本文化会館に設けられた日本庭園である。

文化会館の庭園としては、ローマ日本文化会館（1961）、ハワイ大学東西センターの日本庭園（1963）などがあるが、以後政府、自治体、民間団体（文化団体・宗教団体・企業）による文化センター機能をもった建物と日本庭園とが、文化交流の意味から数多く造られていった。中には、姉妹都市提携によるもの、海外進出企業によるもの、茶の湯普及を目指した裏千家インターナショナルによるものなどが含まれる。

日本の政治文化を直接に海外に伝える役割をその一部にもつ在外公館に造られた日本庭園も、1960年代以降数多く造られている。在アメリカ大使館（1960）、在オーストラリア大使館（1961）、在インド大使館（1967）、在タイ大使館（1967）、在カンボジア大使館（1970、2002年改修）、在韓国大使館（1971）、在アメリカ日本大使公邸（1974）、在シンガポール日本大使公邸（1990）、在ベトナム大使館（1999）、在レバノン大使館（2001）、在イスラエル大使館（2002）などである。

これらに類似した庭園として、直接的に日本が関与したわけではないが、パリのユネスコ本部の庭園としてイサム・ノグチと佐野藤衛門により制作されたユネスコガーデン（1958）、そして20世紀最後に完成したニューヨークの国連本部中庭ピースベルガーデン（2000）もこの系列といえよう。

20世紀後半、太平洋戦争後の海外に造られた日本庭園の設置理由として、最も多いものが自治体による姉妹都市・友好都市関係に基づく日本庭園である。すでに、その数は100を超えている。庭園を寄贈、作庭する段階から人的交流が始まり、日本庭園を会場とした各種イベントの企画実施などを通じて、相手国と日本との相互交流を促進する場を提供している。さらに、庭園の改修、維持管理にも各自自治体から派遣され、あるいは各自自治体から民間ボランティアが現地に就くなど、日本庭園を通じた海外交流に大きく貢献している。そして、現在も姉妹都市・友好都市関係に基づいた、日本庭園の寄贈は増えており特にオ

ーストラリア、ニュージーランド、そして中国などにおいてその傾向が顕著である。

この件に関しては「姉妹都市と日本庭園」も別途論考したい。

おわりに ～海を渡った日本庭園

19世紀末、日本の文物紹介と売り込みのために出展した、万国博覧会の日本庭園と日本の美術工芸品に刺激され、欧米にジャポニズムが起こる。19世紀末から20世紀前半の万国博や大きな博覧会には、日本の参加は欠かせないものとなり、そこには政府、民間企業の出展になる日本庭園が数多く造られた。

熱烈な日本ファンが増加し、日本を訪れ、また日本から庭園材料を輸入して、あるいは日本人庭師や大工を雇い入れて自邸に日本庭園を造りはじめた。こうした個人庭園があちこちに造られ、さらに日本庭園ブームが高まると、万博に造られた日本庭園が跡地の公園に存置されたり、アメリカのジャパニーズ・ティーガーデンのように商業的アミューズメント施設としての日本庭園が造られたりして、多くの一般市民にも親しまれるようになる。しかし、この欧米での日本庭園ブームも1930年代の半ばには、戦争の時代を向かえ、第2次世界大戦、太平洋戦争と続く頃には下火となっていった。

戦後日本に駐留した100万を超えるアメリカ人兵士らの見聞きした良き日本の体験が、再び日本文化への関心と注目を生んでいく。日本の戦後復興期から高度成長期にかけて、海外へ雄飛した日本人も多く、これらが要因となって1950年代後半から始まる日本庭園の築造ブームを迎えることになる。個人の庭園ではなく、市民に公開された公園の一角や植物園の中、在外公館や文化センターに付随した日本庭園が、植物や文化紹介の舞台ともなって、世界のあちこちに造られていったのである。

1960年代以降では平和な時代が続き、世界の文化交流は国と国との間だけではなく、各国自治体レベルでの友好関係の樹立、姉妹都市・友好都市提携が進み、日本の経済が発展した80年代には、自治体や市民団体・地元企業などにより、姉妹都市への日本庭園の寄贈が増加していく。この傾向は、日中国交正常化、東ヨーロッパ諸国やオセアニア諸国と

の友好関係の促進により、益々あちこちに日本庭園が寄贈されることになっていった。特に近年は、姉妹都市の両市民がボランティア参加して日本庭園づくりに参加し、後の管理や庭園でのイベントを継承していく動きにも結びついてきている。

20世紀末から21世紀にかけて、海外における日本食や日本文化の流行は、日本庭園ブームを再び巻き起こしている。海外旅行や海外ビジネスが一般的になるにしたがい、様々な国の人々が日本文化と日本庭園に接する機会を増やし、自宅に、自分の町に日本庭園を造ろうという機運が醸成されているのである。

ところで、海外に造られた日本庭園を管理運営する民間団体の数は多い。外国の人々が自分たち自身の庭園として育ててきているのである。イギリスやアメリカでは全国レベルでの日本庭園愛好団体が誕生している。また、隔年開催の国際日本庭園シンポジウムも2004年のシアトル大会で既に4回目を迎え、参加者の関心はさらに高まっている。

まさしく、20世紀は日本庭園が海を渡った時代であった。そして21世紀を迎えた今、これら海外の日本庭園とその文化を次代に継承すべく、それぞれの国や地域にみあった庭園管理と運営の手立てのグローバルな構築が望まれている。

文献並びに注

- 1 ルイス・フロイス (1585)、岡田章雄訳注、ヨーロッパ文化と日本文化、岩波書店、1991
- 2 ルイス・フロイス (1593?)、柳谷武夫訳、日本史—キリシタン伝来のころ (全5巻)、平凡社 (東洋文庫 第4,35,65,164,330巻)、1963~1978
- 3 ペーター・パンツァー、ユリア・クレイサ著、佐久間穆訳 (1990)、ウィーンの日本：欧州に根づく異文化の軌跡、サイマル出版会、40口絵
- 4 国立国会図書館蔵
- 5 畑和助は1889年のパリ万博のトロカデロの日本出展にかかわり渡仏した庭師。鈴木順二 (1998)、緑の里—マルセル・ブルーストの訪ねた日本庭園 (上)、日吉紀要 フランス語フランス文学、26号、80・83 並びに 鈴木順次(1999)、同 (下)、27号、81

- 6 Lancaster, Clay(1983), The Japanese Influence in America, Abbeville Press, New York, 207
- 7 Pollock, Christopher(2003), Golden Gate Park: San Francisco's Urban Oasis in Vintage Postcards, Arcadia, 22
- 8 Brown, H. Kendall and Melba Levick(1999), Japanese-Style Gardens of the Pacific West Coast, Rizzoli, New York, 20
- 9 文献4) 21
- 10 San Francisco Recreation & Park Department(1994), Japanese Tea Garden 1894-1994, (現地パンフレット)
- 11 鈴木誠 (2005)、荒川・隅田川沿川の庭園、荒川下流誌 (荒川下流誌編纂委員会編)、山海堂、894 - 896
- 12 1891年には南カリフォルニアで庭園管理 (ガーデナー) を専門とする日系1世が記録され、その後1920年の同地域には1,000名を越える日系1世のガーデナーがいた。Hirahara, Naomi(2000), Green Makers: Japanese American Gardeners in Southern California, Southern California Gardener's Federation, 8
- 13 Morse, Edward Sylvester(1886), Japanese Homes and Their Surroundings, Ticknor and Company, Boston 並びに Conder, Josiah(1893), Landscape Gardening in Japan, Kelly and Walsh, Yokohama (2vols., supplement with collotypes by K. Ogawa)
- 14 Suzuki, Makoto and Kanchana Nirasemana(2005), The Catalog of Materials on Japanese Gardens (日本庭園に関する欧文文献リスト), Ver. 2005.
- 15 川名はカリフォルニア大学ロサンゼルス校教授の肩書きで、1970年代から90年代にかけ全米あちこちで日本庭園の設計を担当した。メンフィス植物園日本庭園拡張設計 (1989、オリジナルデザインは戸野琢磨1965年) も手がけている。
- 16 Tamura, Anna Hosticka(2004), Gardens Below the Watchtower: Gardens and Meaning in World War II Japanese American Incarceration Camps, Landscape Journal, Vo.23 No.1, 1-21
- 17 本稿の基礎となったものに鈴木誠 (1997)、欧米人の日本庭園観、造園学会論集別冊 No.2、東京農業大学造園科学科がある。

※本稿は「海外の日本庭園調査報告書」(日本造園学会、2006)を一部改稿したものである。